2018年7月11日（火）10:00 ~ 18:00 Rainer Schumidt 教授のマスター・クラスがL-502にて行われました。

シュミット先生は、ザルツブルグ、バーゼル音楽大学の教授であり、またハーゲン・カルテットの第2ヴァイオリン奏者として世界中のホールで演奏していらっしゃいます。

シュミット先生のレッスンでは、音楽の伝えるメッセージについて、調性の持つ概念や転調が与える音楽の変容の質などから、楽譜を深く読み、いかに演奏するかを解き明かしてゆく大変興味深いスピリチュアルなレッスンでした。

４年生のベートーヴェンのヴァイオリンソナタ第6番のレッスンでは、特にベートーヴェン特有の転調やフレーズの構造について読み解き、2年生のバッハのソロソナタ第1番のフーガでは、音楽と戦わずフレーズの動きに身も心も寄り添っていかに弾けるかについてのレッスンでした。

ヴァイオリン2人とピアノのモシュコフスキーのトリオ（2年）、ブラームスのホルントリオ（4年）の室内楽では、楽譜から音楽のキャラクターの読み取り方や、調性や和声の変遷から、音楽の緊張と弛緩がいかに作り出され、それぞれの楽器が対話しているか、音楽全体にとってのバスの役割など、室内楽をパートではなく、スコアの中での音楽作りについてのレッスンでした。

4年生の二名のレッスンでは、高揚してゆく音楽、直観で感じたイメージの表現のために音楽の動きと体の動きとをいかに一致させ、無駄な動きを排除するか、また、背骨や肩の前傾や力みが表現や自然な楽器の響きを妨げているかを指摘、自然な体の使い方をご指導いただきました。

学生たちはレッスンの中で、自分の音楽や楽器の響きの大きな変化に驚きと喜びを感じていました。室内楽奏者らしい深い楽譜への洞察と、伝統に裏付けられた知性、音ではなく人間の心の琴線に触れる音楽を演奏するためのアプローチ、肉体の動きと音を生み出す事との密接な関係についてなど、豊かな時間と共にレッスンが進められました。

惜しむべくは、是非もう少し多くの方に聞いていただきたかったマスター・クラスでしたので、次の機会には開催の時期の検討や、宣伝をしっかりしてゆきたいと思いました。

ヴァイオリン　沼田園子